

平成二年七月一九月  
スリランカ国立ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院

# 客員教授公務報告書

森 祖道

(第六回派遣留学僧  
愛知学院大学教授)

## 目 次

- 一 序 言
- 二 ケラニヤ大学当該大学院の概要と特色
- 三 正規の講義
- 四 公開講義
- 五 博士論文の審査
- 六 結語——今後の課題——

## 一 序 言

平成二年七月末より約一ヶ月の間、私(当時、城西大学教授・東大講師)はスリランカ国立ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院に日本仏教講座担当の客員教授(Visiting Professor of Japanese Buddhism, Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies, National University of Kelaniya, Sri Lanka)<sup>(1)</sup>として招聘され、主としてコロンボ市内に滞在した。ただし

「招聘」といっても、経済的に豊かな先進国の場合と違つて、発展途上国の場合は、先方が旅費・滞在費など経費一切を負担するという例は少なく（もし負担したとしても、それは彼等の基準による非常に少額なものであつて、それだけでは不足である）、出講者の側の負担となる。これは、日本の様に「経済大国」と見られるいる国の一、発展途上国に対する文化的援助の一環と理解しなければならないことであろう。現にわが国の政府は、毎年、何千億円という巨額の対外援助を多くの途上国に与えているわけであつて、各国の事情に応じて、実に多様な経済的・社会的・文化的対外援助協力が継続的に実施されつゝある。従つて私の出講の場合も、右の様な对外援助協力の一事例と解さなくては、世界を相手にする日本の国際活動は成り立たないであらう。



筆者に用意された客員教授室入口

に、善光寺海外留学僧派遣育英会に経済的援助を申請したところ、幸いにも、本育英会黒田武志理事長をはじめ、関係者各位のご理解を賜わり、早速、第六回派遣留学僧に採用していただいた。この段、先ずもつて黒田理事長並びに関係者各位に深く感謝する次第である。また本育英会に私をご推举下さった、恩師中村 元先生（本育英会顧問・東大名誉教授）、並びに実際に仲介の労をとつて下さった畏友阿部慈園氏（本育英会参与・明治大学専任講師）にも厚く御礼申し上げる。<sup>(2)</sup>

ところで今回、客員教授として要請された公的な業務やそれに対する抱負などについては、応募の当初、本育英会に提出した拙論「禪の国際化と私の役割——客員教授としてスリランカ仏教徒に対する啓蒙——」に既に詳しく述べた。そしてその内容は殆んどそのまま、『成寿』誌第十五号（一九九〇年 秋季号）に掲載されたわ

けである。しかしながら、実際に現地に出向いてみると、当初、文書などで連絡を取り合意していた公務の内容や予定には或る程度の変更があつた。当大学院としては、海外より初めて招く客員教授でもあり、また滞在期間も比較的短期間であつたことなども原因して、最初より確定的な予定計画を立てることは困難なことであつたと推察する。とにかく、国情の全く異なる海外の大学、特に発展途上国の大学においては、何事も臨機応変、相手の要望に可能な限り即応して、相手の側の役に立つ様に努力することが肝要と判断して、私は、日本で準備して来た講義の一部を変更したり、最初は全く念頭になかつた緊急の用件を受けたりするなど、出来るだけ柔軟に対応して、先方側に満足してもらう様に努めた。以下において報告する私の公務の内容が、右に触れた最初の予定計画と、一部相違しているのはすべて右に述べた事情によるも

のである。この一点を最初にお断りして、以下順次、実際に現地において行なつた様々な教育研究上の公務内容を報告する次第である。

## 二 当該大学院の概要と特色

実際の具体的な公務報告に入る前に、その前提として、私が招聘されたケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院の概要とその特色について述べる。このことは私の公務をより良く理解していただくためにも必要なことと考へるからである。

ケラニヤ大学は、その前身をウイディイヤーランカーラ仏教学院 (Vidyalankara Pirivena) と言つた。これは比丘の教育を専門とする学院であつたが、それが一九五九年に国立大学に昇格し、Vidyalankara University となつた。その後、一九七一年にはセイロン大学ウイディヤーランカーラ校舎 (University of Ceylon,



大学院の正面玄関

Vidyalankara Campus) と改称され、東洋学部・文学部系の大学となつた。そして更に、一九七八年には現在の名称たる University of Kelaniya となり、仏教学を含む人文科学系の学問を中心とする総合大学へと発展し、今日に至つては、<sup>(3)</sup> 大学のメインキャンパスは、コロンボ市郊外のケラニヤに所在するが、パーリ学仏教学大学院だけは、ここを離れてコロンボ市内に独立した校舎を有する。

当大学院(直訳すれば「研究所」)は、最初、ウイデイヤーランカーラ仏教学研究所(Vidyalankara Institute of Buddhist Studies) という名で、一九七五年にケラニヤ大学の一機関として設立されたが、一九八〇年より改組されて現在の名称となつた。現在、当大学院には仏教哲学研究・仏教文化研究・仏教文献研究という三つの専攻コースがあり、それぞれに次の四つの課程が設けられている。<sup>(4)</sup>

- (1) 専修課程 (Diploma Course 一年間の講義)  
(2) (文学) 修士課程 (Master of Arts Course 一年間の講義)

- (3) (哲学) 修士課程 (Master of Philosophy Course 最低一年間の講義並びに論文提交)

- (4) 哲学博士課程 (Doctor of Philosophy Course 最低三年間、論文提出、講義はなし)

右の四課程の内、(1)と(3)はわが国の大学院制度には見られないもので、(1)はいわば学部の卒業生が更に一年間の教育を受ける「専攻科」に相当し、(3)は形の上ではいわゆる修士課程と博士課程の中間に位置するものである。ただし修

学年数や教育内容などより見れば、(3)がわが国の修士課程と同程度のレベルであろう。いずれにせよ右の制度は、スリランカ及び他の外国の諸大学にもその例が見られる或る程度一般的な制度であるが、しかし次の諸点はケラニヤ大学の当大学院の顯著な特色と成つている。

先ず、授業に使用する言語によつて、シンハラ語クラスと英語クラスに分けられている。スリランカの諸大学は、独立後二十年程過ぎた頃より、一種のナシヨナリスティックな雰囲気の

下に、一部の理工系の学部を例外として英語による授業を禁止し、自国語たるシンハラ語・タミル語による教育を徹底させた。その結果、文系の学部は原則としてすべて自国語による授業のみとなり、このシステムで教育された四十歳半ば以下の世代は、多く、教師も学生もそれ以前の英語が堪能な世代とは比較にならない程、英語に弱くなり、そのため国際的感覚も乏しくなつてしまつた。この様なマイナス面に対する国策上の反省もあつて、たとえ大学院レベルの限定された範囲内のこととはいゝ、当大学院では、英語による教授のコースを導入したわけである。この試みは文系の教育機関では今なお例外的な事例である。因みに一九九一年一月より

始まる九一年度の各コースの在籍者数は次の通りである。<sup>⑤</sup>

専修課程 シンハラ語クラス 七四名  
同 英語クラス 一七名

(文学)修士課程 シンハラ語クラス 一四七名  
同 英語クラス 一二名

(哲学)修士課程 四一名  
哲学博士課程 九名

合計 三〇〇名

右の表によつて、やはりシンハラ語のクラスの人数が英語クラスのそれを大幅に上廻つてゐることはよく分かる。そしていざれにしても、仏教学の分野だけで総数三〇〇人というのは驚異的な学生数である。スリランカの大学(学部)の入学者は、同年齢者の百人に一人程度といわれているから、その数字に照らしてみても、一大学の一分野の大学院在籍者数が三百名というのは、大変な盛況である。この盛況の秘密はい

つたい何であろうか。次にこの点について説明したい。

これは実際に現場に臨んで初めて認識したことであつたが、当大学院は非常にユニークかつ積極的な教育経営方針を採用していた。その第一は、事実上、目下日本でも盛んになりつつある成人学級・公開講座ないしはカルチャーセンターの方式の採用である。つまり当大学院では、いすれかの大学の学部の卒業生、即ち学士号を有する者ならば分野を問わず誰れども志願出来るという前提に立っている。この場合、面接などの選考を経て、仏教学を初めて学習する人は先ず専修課程に入り、ついで（文学）修士課程に進み、成績によつては更に上級のコースに順次上つて行くという段階が用意されているわけである。また学部で仏教学を専攻した者は、勿論、試験に合格しさえすれば（文学）修士課程から始める事になる。この様に入学者に対し

て間口を拡げることによつて、希望者の数が増大したと見られる。次にその第二点。右の方式は、更に、授業時間を午後から夕方にかけて集中させることによつて、職業人に対しても門戸を開くこと、及びコロンボ市内の交通至便の地に開講することによつて、彼等に対して仕事と学習の両立の便を与え、その効果を一層發揮している。また勿論、年齢の制限はないわけであるから、定年退職後の入学者もかなり含まれている。そして老若男女の多様な経歴年齢の人気が集まつたクラスには、相互に良い意味の刺激が生まれて、プラスになる面が多い様である。第三点は、英語クラスを設けることによつて、シンハラ語の出来ない外国人に対しても門戸を大きく開いている事である。クラスの具体的な人的構成の例は次節で改めて説明するが、とにかく以上の様に、当大学院は様々な形の積極的な開放策を探ることによつて、一種の生涯教

育・社会人教育・国際教育の場を広く提供しているわけである。しかもそのすべてのコースが、大学公認の正規のコースとして、それ相当の学位の授与と結びつき、正式の資格として広く社会的に認知されるシステムとなっている、この点がまた受講生にとっての一つの魅力となつてゐるのである。この点は、わが国のその場限りの公開講座やカルチャーセンター方式とは大いに異なるところであろう。総じて言えば、当大

学院の以上の様な在り方には、一般に大変閉鎖的で中途半端な日本の大学院にとつて、参考とすべき点があるのでなかろうか。

更に当大学院のもう一つの大きな特色は、その組織が、事実上、複数の大学の連合体となつてゐる点である。大学院の最高議決機関としては、大学院長、文部次官などをメンバーとする「運営委員会」(Board of Management)という行政機関があるが、その下にあって実質的に

教育研究上の権限と責任を持つてゐるのが「教授会」(Faculty Board)であり、そのメンバーにはケラニヤ大学の教授スタッフだけではなく、他の幾つかの大学の代表的な仏教学者も加わつてゐる。また実際の教員組織には、他大学の更に多くの教員が参加していて、さながら複数の大学の合同の教育研究機関という感がある。

### 三 正規の講義

私がコロンボに到着したのは七月三十日の深夜で、大学院の第三学期（八一十月）は八月一日から開始された。当初、私の講義題目は、（文学）修士課程では「日本の禪仏教」、専修課程では「日本の仏教文化」という予定で、その準備をして出掛けたのであつたが、先方側の要望で、急拵、次の様に変更された。即ち、修士専修両課程共に「日本の禪仏教」について講じ、この



或る日の講義風景（修士課程）

正規の授業の外に、受講生以外の人も自由に聴講出来る、いわゆる「公開講義」（Public Lecture）を二回実施する。そしてその内の二回は、当ケラニヤ大学大学院においてではなく、はるかに離れたキヤンディ市郊外のペラデニヤ大学において行なうこととなつた。このペラデニヤ大学大での公開講義は、当大学に居る旧知のデ・シリバ教授の強い要請によるものであつた。更にもう一つの重要な公務として、博士論文の審査という仕事も急に委嘱された。これら二つの緊急の公務については、後に改めて述べる。

正規の講義は、修士課程が毎週火曜日の三時より一時間、専修課程は木曜日の四時から一時間実施されたが、休日や特別な所用と重なつて、実際には、修士過程で六回、専修課程で五回の授業を担当した。講義の内容としては、インドの禪の歴史、中国の禪の歴史、日本の禪の歴史、道元の生涯と曹洞禪、臨済禪と公案、禪の文学

(俳句・和歌など)などの諸テーマを探り上げ、初心者にも理解出来る様に解説した。その際、受講者は原則として上座部仏教の比丘か在家信者である点を考慮して、可能な限り上座部の教義や実践との比較において、禅の特色を説明する様に努めた。

次にその受講生について説明すると、専修課程の学生は総数十六名、修士課程は十二名、そしてその内訳は実に多様多彩であった。専修課程の十六名の内、九名が比丘、四名が普通の職業人、一名がカトリックの神父、一名がカトリック神父を目指して修学中の人、そして一名が女性であった。九名の比丘の内、何んと五名が中国大陸出身者で、二名がスリランカ人、マレーシヤ人とバンガラデイシュ人が各一名ずつであつた。一般職業人の中には大学の法律学講師、スリランカ中央銀行の重役、翻訳家、イギリス人のコンピューター技術者などが含まれてい

た。その他実際には、若干名の無登録聽講者も混つており、その中には韓国人男性も一人いた。年齢は全体の最年少が二十六歳、最年長が五十二歳であつた。また修士課程では、比丘が二名、カトリック神父が二名、残りは一般在家者であった。在家者の内、四名は女性でカレッジの英語教師、退職教師、主婦が各一名、そして大谷大学の仏教学科を卒業した日本女性も受講していた。男性の在家者の内訳は、文部省の退職官僚が二名、大学の英語教師と退職した化学技術者が各一名であつた。なお比丘の二人は共にビルマ人で、他の受講生は日本人女性一人を除いてすべてスリランカ人であつた。年齢は三十六歳より六十五歳までであつた。

以上の様に、専修・修士の両課程共に、出家者と在家者の双方にわたり、また男女両性にわたり、国籍・職業・年齢など実に多様多彩なメンバーの集まりであつたわけだが、全員揃つて

学習意欲が旺盛で熱心に受講していた点は共通していた。午後の暑い最中を、それぞれかなりの時間をかけて登学し、質問なども仲々活潑であつて、また欠席者は大変少なかつた。そして、担当した両課程共に、外国人が比較的多数であったこと、及びスリランカ人でも比較的年輩の人（五十歳前後以上）が多かつたことは、これが英語による授業のクラスであつた点にも、その一因があると考えられる。外国人は、勿論、シンハラ語よりも英語を選択する人が多いし、スリランカ人の場合でも右の年齢層は英語による教育を多く受けた世代である。一方これとは対照的に、シンハラ語による授業のクラスは、恐らく全員スリランカ人の学生で、しかも比較的若い世代の人が多いと見られる。そして当然のことながら、シンハラ語による各課程の人数ははるかに多く、その中には比丘もかなり含まれていた。



或る日の講義風景（専修課程）

#### 四 公開講義

前にも触れた通り、先方側の要望により公開講義は全部で三回実施された。その概況は次の通りである。

##### 第一回

日時 平成二年八月二九日午後四時一六時  
場所 国立ペラデニヤ大学文学部  
主催 同学部仏教学科（司会・ウイターナツチ主任教授）

講題 日本の仏教研究の現状 (Buddhist Studies in Japan Today)

聴講者 約三十名

右の講題は先方の希望でもあつたわけであるが、とにかく日本の仏教研究の歴史と現状については殆ど何の情報もなく、知られていない。

その原因の一つは、スリランカが歴史的に英語圏の国であるために、日本語を解する学者は殆

どおらず、従つて強い関心はあつても日本の仏教学に対する知識は極めて乏しいこと、そしてもう一つは、日本の研究者が自国の研究史や研究成果を、外国語（例えば英語）によつて外国人に知らせようとする意欲と問題意識に乏しい点にあると言えよう。そこで私は極めて初步的な情報も含めて、今日のわが国の仏教研究の特徴、達成点、主要な研究者とその業績、将来の課題などを中心に、次の諸項について概説した。

##### 1、序論

##### 1、歴史的背景

##### 2、研究分野の分類

##### 1、研究機関と組織

##### 1、大学

##### (1) 国立大学

##### (2) 私立の仏教系大学

##### (3) その他

## 2、特殊な研究機関

### 3、仏教系学会及び仏教系協会

#### (1) 全国規模の組織

#### (2) 大学内の組織

#### (3) 地域的組織

### 三、学位と教育制度

#### 1、学士号

#### 2、修士号

#### (3、哲学博士号 Ph. D.)

#### 4、文学博士号 D. Litt.

### 四、学術雑誌と記念論文集

### 五、最近の主要なる研究成果

### 六、刊行中のシリーズ出版物とプロジェクト

### 七、新しい研究傾向と課題

#### 1、コンピューター利用の研究

#### 2、学際的研究

#### 3、現代仏教に関する研究

#### 4、国際的研究

第二回

日時 平成二年九月五日午後四時—六時

場所 ケラニヤ大学当該大学院

右の講義において、私は、明治以来の過去一世紀にわたり、日本は欧米・インド・東南アジア・東アジア・チベットなどの諸国より、常に最高の仏教研究の方法論・資料・成果を学んでこれを採り入れつつ、他方では、古来の伝統的な研究の蓄積をも活かして、非常に高水準広範囲かつ多岐にわたるユニークな仏教学を確立するに至った点を強調し、具体的にその成果を紹介した。また最近の新しい研究上の傾向や課題、更には目下進行中の新しい研究プロジェクトなどについても、出来るだけ詳しく説明した。その結果、聴講者は日本の仏教研究者の層の厚さ、幅の広さ及びその水準に驚いた様子であったが、中でも特にコンピューター利用の新しい研究とその成果には強い関心が集まつた。

主催 同大学院（司会・遠藤敏一講師）<sup>(8)</sup>

講題 日本の仏教研究の現状

聴講者 約四十名

先方の希望により、ペラデニヤ大学での講題と同一のものを採り上げたが、勿論、聴講者は一人も重複していなかつたので、この点は全く問題なかつた。本公開講義の通知は、コロンボ市内及び近郊の諸大学などにも送られていたので、これらの諸大学などよりの来聴者もかなり加わつてゐた。聴講者の反響としては、前回同様、日本の仏教学に対する質量両面よりの評価は高く、またコンピューター利用の新しい研究はやはり人々の耳目を引いた。

### 第三回

日時 平成二年九月十九日午後四時—六時

場所 ケラニヤ大学当該大学院

主催 同大学院（司会・カルナダーサ大学院



第三回の公開講義

長)

講題(1)十一支縁起説成立の時期 (The Time of Formation of the Twelve Link Chain of Dependent Origination)

講題(2)世界のペーラ研究仏教研究に対するペーランカの役割—ペーリ文献協会の刊行物を中心として (The Role of Sri Lanka for the Pali and Buddhist Studies in the World—with special reference to the Pali Text Society's publications—)

聴講者 約四十名

第二回の講義は、これが最終となるので、講題を一つ採り上げた。第一のテーマは、原始仏教以来、全仏教史を通して重視されて来た基本教理の一つである「十一支縁起説」の成立に関する問題である。縁起思想の代表的な教説である

十一支縁起説は、最初期の經典である『スッタ

ニアーダ』の古層などには未だ見られないので、これは原始仏教時代の中で或る年月を経た時期に出来上つたものと考えられる。しかし所属部派の異なる現存のニカーヤ・阿含・各種の律藏・サンスクリット残存經典などを広く精査すると、各部派の文献にほぼ共通して十一縁起説が説かれていることが判明した。これによつて、この十一縁起説は、インドの仏教教団が根本分裂を起す以前に既に成立していて、それがそのまま各部派に共通して伝えられたと結論出来る。以上の様な研究を先ず詳しく論じた。これは、どちらかと言うとペーリ文献にのみ傾斜し勝ちなスリランカの学者に対して、広くパ・梵漢の各種資料を比較検討することが必要である点を強調する意図をもつてなされた講義であった。<sup>(9)</sup>

一方これに対しても第一のテーマは、この国の学界を激励し彼等の得意とする分野で世界の学

界に一層、貢献してもらいたいという希望をもつて採り上げたつもりである。即ち世界のパリ文献・パーリ仏教の研究は、大英帝国の絶頂期に当る一八八一年にイギリスに設立されたパリ文献協会 (Pali Text Society)を中心として、国際的な協力態勢の下に促進されて来た。

そしてかつてはスリランカの有能な学者は多数、パーリ原典の校訂本や英訳などをこの協会より出版し、国際的に重んぜられていた。しかるに近年は、右協会自体の活動も往年ほどではなくなっているせいもあるのか、スリランカの学者の本協会を舞台とする国際的活躍も、以前よりは低調である。私は偶然にも右の協会の日本代表の職 (Regional Representative for Japan of the Pali Text Society, U. K.) を委嘱(19)られていて資料を豊富に所有しているので、本協会の数百点にも及ぶ全刊行物の中よりスリランカの学者の手に成るものをすべて列挙解説

し、これを高く評価しつつ、先人の偉業を継承する意味で、この分野での今後の継続的貢献を強く要望したのであった。

## 五 博士論文の審査

既に述べた様に、この公務も当初の予定にはなく、出発の直前に、急遽、要請されて來たものであつた。そのため当方も急いで必要と考えられる文献資料を揃えて持参した。審査の対象となつた哲学博士 (Doctor of Philosophy) 論文とその審査の経緯は、およそ左記の通りである。

提出者 K・ダンマジ ラーティ師 (Ven. K. Dhammadajoti)  
論題 漢訳法句經の英訳と研究 (The Chinese Version of Dhammapada translated into English with Introduction and Annotations)

審査機関 ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院  
審査員 M・パリハワダーナ教授 (Prof. Dr. M.  
Palihawadana)<sup>(1)</sup>

K・アヌルッダ師 (Ven. Dr. K.  
Anuruddha)<sup>(2)</sup>

森 祖道 (Prof. Dr. Sodo Mori)

周知の通り、法句經の漢訳は四種類も存在するが<sup>(3)</sup>、ダンマジヨーティ師は、未だ英訳されたことのない維祇難等訳の『法句經』一巻を採り上げ、その英語全訳を詳しい註記を付して完成させた。同時にその序論として、パーリ語・ガンダーリー語・梵語、他の漢訳など各種の法句經との比較において、本テキストの詳しい文献学的研究をなし、両者合せて学位請求論文として提出した。一方、当該大学院としては、この論文が博士論文としては設立以来最初の審査論文であった。その上、その内容が漢訳經典に關係するものであるので、この分野には通常、無

縁なスリランカ人の学者だけで審査することは困難と判断し、急據、私に協力を求めたわけである。著者ダンマジヨーティ師の漢訳『法句經』の英訳は、世界で初めての試みであつたので、これは十分に評価し得る業績であるが、問題は、その序論に示された文献研究であつた。著者は、パーリ・サンスクリット・中国語・漢文・英語などの外に、日本語にも通じていて<sup>(4)</sup>、水野弘元博士の大著『法句經の研究』(春秋社、昭和五六年)、その他、博士の法句經に関する諸研究を参照することが出来た。著者は右の書を水野博士を訪問した折に、博士より直接贈与されたとのことである。とにかく、著者はこの名著を百ペーセント活用して自身の研究を纏めた。従つてそれは、部分的には自説を主張している箇所も見られるが、大枠においては、水野博士の所説を超えるものではない。勿論、博士の研究は日本語で著わされているので、それを参照し



博士論文の口述試験風景：向って左よりアルッダ師、パリハウダーナ教授、筆者、カルナダーサ大学院長、事務長、ダンマジョーティ師（受験者）

つゝ英語で研究を発表した点は、それ自身独自の価値を有するものと評価されるべきであるが、しかし内容的には右に述べた通りであった。そしてこの点を指摘し得たのは、審査員の中で私だけであったので、この様な点からも私の参加は役に立つたと考えてよからう。とにかく私は、右の様な諸点を纏めた審査報告書を作成して大学院に提出した。三名の審査員、それぞれの審査報告書が出揃つたところで、平成二年八月二十二日午前中に当該大学院において、右論文作成者に対する口述試験（Oral Examination）が実施された。試験は大学院長カルナダーサ教授の司会の下で行なわれ、論文作成者と審査員の間で種々なる質疑応答がなされた末に、審査員の協議に基づいて審査論文は合格と判定された。そこでその旨を記述した最終的な審査報告書が早速作成され、審査員全員と司会者がそれぞれそれにサインをして審査はすべて終了

した。因みにわざか二ヶ月の私の滞在期間の半分近くは、主としてこの審査のために費やされる結果となつた。

## 六 結語—今後の課題—

以上、当該大学院において客員教授として要請された公務とその結果について、各事項に分けて報告したわけであるが、最後に、今回のさやかな経験を基として今後の課題について若干述べてみたい。

(1) 先ず、何もスリランカのこの大学院に限らず、広く世界各国の諸大学などとの学術上の人物交流を促進し、要望があればどこへでも出講出来る様な人材の育成が急務であろう。勿論、現在でも外国の学者との交流は、或る意味では非常に盛んである。しかしままだ外国との交流と言えば、「明治百年」來の風潮で、外国に留学するとか外国人学者を日本に招いて教えを乞う、

という一面に傾斜し過ぎてゐる様に考えられる。つまり学術文化上の輸入超過現象がそこには見られるのである。今後共、勿論、彼等から学ぶべきものは謙虚に学びつつ、しかしその方でもしわれわれに彼等より優れた点があるとするならば、それを彼等にも知らしめて、知識の共有を目指す必要があろう。そうすれば、そこに初めて「互恵平等」の学術交流が実現するものと考える。そしてそのためには、(1)学問上の実力、つまり教える内容を充実させると共に、(2)それを十分に表現する手段、つまり国際的に最も通用する外国语(例えば英語など)を読み、話し、書く能力を養わなければならぬ。こと仏教学の分野では、(1)に関しては日本には非常に優れた学者が輩出し、日本語で著わされたその業績の大きな蓄積があるわけだが、われわれは今なお(2)の点に関しては決して十分とは言えないと思う。今後の若い世代に大きな期待を寄

せる所以である。

(2) 次は、日本の研究者の大多数が所属する日本の大大学には、通常、「有給研究休暇制度」、いわゆる「サバティカル休暇制度」が未だ確立されていない点が問題である。この制度は、原則として六年間、学生の教育に従事すれば、一年間の有給研究休暇が与えられるという制度（従つて三年間で六ヶ月、二年間で四ヶ月の休暇がとれる）である。欧米の大大学は勿論のこと、かつての植民地時代に欧米人によって設立されたアジア・アフリカの多くの国の大大学にもこの制度は当初より導入されている。中で独り自力で大学作りに励んで来た、明治以来の日本においてのみ、学者の再充電に不可欠な余裕を与えるこの制度は何故か存在していない。そのため、日本の学者は一旦大学に奉職した後は、通常の短い休暇を利用する以外に、海外に出掛けることは仲々困難であり、特に長期の滞在は普

通は不可能である。従つて例えば客員教授として招聘される様な機会があつても、一年を通して出講することは出来ず、その協力も中途半端なものに終り勝ちである。言うまでもなくこの様な場合に、外国ではこのサバティカル休暇をフルに利用するわけである。従つてこの点は、日本の今後の文教政策、国際交流政策上の大きな課題であると考えるのである。

(3) 右の二点が仮りに改善された結果、国際的に通用する有能な学者が輩出し、彼等に時間的余裕も生まれたとして、なお残るのは経済的問題であろう。本「報告書」の「序言」でも述べたが、先進国同志の場合はともかく、先進国から発展途上国へ出掛ける場合は、それが留学であれ研究であれ会議であれ出講であれ、自國側の経済負担がまず当然のことであろう。そのため国際交流基金の様な国家的機関も存在するわけであるが、周知の様に、その予算規模は今な

お極めて小さく、他の先進諸国とのそれとは格段の差がある。つまり日本人は今なお自国の学術文化の輸出啓蒙という問題には関心が低いのである。その上、これら諸機関の当事者の考えでは、日本からの文化的国際交流と言えば、日本語の教授とか伝統的な日本芸能・文学・武道などの紹介とかいうことが中心の様である。更には、いわゆる「政教分離」の固定観念に支配されて、彼等は宗教ないしは宗教文化と関係のある学術文化交流については、極めて理解が乏しい様である。

そこで少くとも仏教ないしは仏教研究上の国際交流は、どうしても仏教界自身がその経済的負担をして、これを推進しなくてはならないであろう。つまり仏教界の諸団体<sup>3</sup>が自ら淨財を集めてこれを有効に使用し、人物の派遣、人物の招聘を盛んにし相互<sup>4</sup>の交流を一層活発にすることが、是非共必要なことと考える。

大変抽象的な理想論あるいは單なる常識論に終結したかも知れないが、以上の三点を今後の課題として指摘し、本報告書の「結語」としたい。

#### 註

- 1、現住所は、No.9, Gower Street, Colombo-5.
- 2、またロサンゼルス禪センターを設立し主宰されておられる前角博雄老師よりは、講義の参考資料として同センター関係の貴重な資料を、同じく駒沢大学の小笠原隆元教授よりは海外における禪の活動状況に関する諸資料を頃戴した。この段深く感謝する。
- 3、Ferguson's Sri Lanka Directory, 1985-88, Colombo 1985, p. 1439.
- 4、University of Kelaniya, Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies, Prospective

*tus 1989-1992, Colombo 1989.*

5、大学院長カルナダーサ教授の教示による。

6、現在の大学院長 (Director) Y・カルナダーサ教授は、パーリ・アビダンマの専門家で数年前に来日し、各地の大学で講義をした。

7、Prof Lily de Silva同教授はペラデニヤ大文学部長、仏教学科主任教授も務めた長老教授であり、またケラニヤ大当該大学院の教授会メンバーでもある。わが国にも数年前に來訪したことがある。

8、当日、カルナダーサ大学院長が病氣欠席しだため、日本人講師の遠藤氏が代理を務めた。

9、本講義の全文はその註記と共に、同一の英文題名で左記の書に収められて出版される。

『前田惠學博士頌寿記念・佛教文化學論集』

11喜房佛書林、平成三年七月刊行予定。

10、例、*Pali Text Society, List of Issues*

1989, Oxford 1989.

11、シユリ・ジヤワルダナ大学言語文化学科

主任教授。彼の専門はサンスクリット学であるが、パーリ語の法句經を英訳した実績もある。*The Dhammapada translated by John Ross Carter & Mahinda Palihawadana, New York, Oxford, Oxford University Press 1987.*

12、ケラニヤ大学パーリ学上級講師、仏教・パ

ーリ大学前副学長。

13、いすれも『大正新脩大藏經』第四卷所収。

(1)「法句經」二卷、吳黃武二年(一一一四)維祇難等訳。(2)「法句譬喻經」四卷、西晉惠帝代(一九〇—三〇六)法炬・法立共訳。本經には英訳あり。(3)「出曜經」三〇卷、姚秦建元六年(三九九)竺仏念訳。(4)「法集要頌經」四卷、宋太平興國七年(九八二—一八四)天息災訳。本經にも英訳あり。

14、彼はマレーシヤ国籍の中国人で上座部の比

丘となり、現在はスリランカの寺院の住職を務めつゝ、当該大学院の専任講師として大乗仏教の講座を担当している。<sup>15</sup>

15、彼は日本語を台湾において学習した。

ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院の看板

